

京都大学 溝上慎一先生

新しい社会を見据えた 大学教育の変化と「学士力」

特集
インタビュー

全国の大学でキャリア教育、キャリア形成支援が広がるなか、正課教育でも、知識を越えて、総合的な力を養うための教育が検討され始めています。京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一先生に、現在の大学教育の課題と学生のキャリア教育について、お話を伺いました。



溝上慎一先生 プロフィール

1970年福岡生まれ
大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程修了。京都大学高等教育研究開発推進センター・准教授。著書に「現代大学生論—ユニバーシティブルーの風に揺れる」(NHKブックス)、「大学生の学び・入門—大学での勉強は役に立つ!」(有斐閣アルマ)など。最新刊は「自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる—」(世界思想社)

今ほどの大学でも学生の授業出席率が上がっています。これは学生自身の意識の問題として考えるよりは、本来の姿を作り出してきた、大学改革の成果としてとらえています。

もはや古いノートを読み上げるだけというような授業は少なくなり、教員の側では学生が少しでも興味を持ってくれるような授業に努めています。学生の「授業満足度」は、すでに大学教育のテーマではありません。

現在、大学教育の問題は、大学の「学び」が単なる知識の獲得や伝達を超え、学生のどのような成長につながるのかということなのです。

社会変化と大学教育

以前の日本では、入学した大学や大卒の資格が将来につながり、企業

でもそれらを基準に採用していません。しかし、バブル経済崩壊以降、年功序列賃金や終身雇用制が揺らぎ、中途退職や転職などが一般化するなど、企業の素地が変わりました。大学教育に対しても、「社会人として一歩踏み出せる人材を育ててほしい」という要求があり、経産省から「社会人基礎力」という用語も出され、多くの大学で正課・正課外でキャリア教育、キャリア形成支援が行われるようになりました。

「汎用的技能」を育成する

昨年文科省中央教育審議会の学士課程教育の在り方に関する小委員会から、大学教育は、知識・技能・態



度などの能力を、一体化して育成する必要性が打ち出されました。「学士力」の1つである「汎用的技能」の育成はこれにかかわります。

従来型の講義や演習ではすまないということですが。例えばアメリカの大学では、講義だけで授業が成り立つとは考えず、授業外に課題やレポートを出すことは当たり前です。演習でも、一般的に今の日本の大

学では、その場でできる議論をし、発言しない学生がいてもかまわないような雰囲気があります。そもそも演習とは、講義で習った知識や課題を通して議論していくなかで、実際に理解しているのが問われる、知識とアクションがセットになっている授業であるはずですが。

現代の複雑化した社会の中では、抽象性や体系性というレベルで頭を使わなければならない仕事が増えてきています。また、単純なマニュアルベースの作業でも、課題意識をもって取り組める人と、そうでない人は、はっきりと分かれてきます。

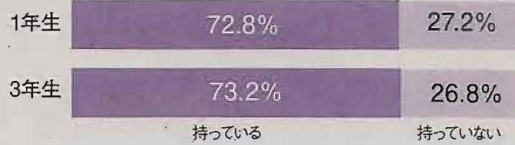
ポイント

POINT

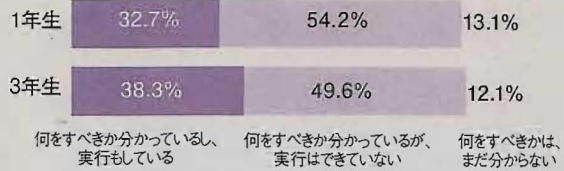
- 正課の大学教育が変わりつつあります
- キャリアデザインは早めに
- 正課・正課外活動のバランスが重要



将来の見通し



実現に向けての実行



学生が、このような力をつけていくための授業が求められています。

勉強を社会へつなげる

90年代以前、大学の中で学生たちが適応していくためには、クラブ、サークル、友人などで、豊かな人間関係を作り、お互いのコミュニケーションの中で、現実というものを理解しながら、自分の将来を考えていきました。ところが、2000年頃から最近の学生は、勉強して社会へどうつながるか、自分の将来をどうデザインするかということが、大学生活への適応を規定する大きな要因と言われています。

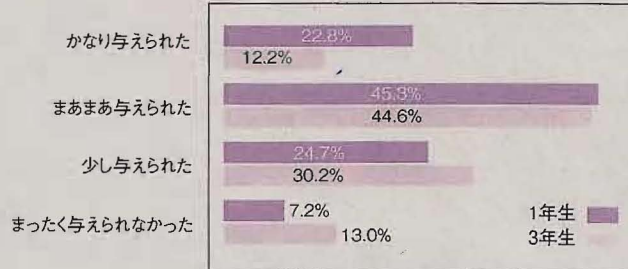
大学教育全体としてもそういう雰囲気があり、学生たちも将来につながるために今の勉強があると考え始めています。

しかし、高等教育段階まで来ると、課題の意味や自分の成長をリアルタイムで実感することは難しく、「なぜこの勉強をしなければならんだらう」などと考え始めると二進も三進もいかなくなります。多少はバカになって目の前の課題を一生懸命こなしていく必要があります。

将来の自分を描く

「自分の将来は大学に入ってから考える」ことは別次元の問題で、できるだけ早い時期から考えたほうがいい。ある程度将来の目的をもって入学してきた学生の半分は、1年後に

中学・高校での進路指導などで、将来の生き方を考える機会が与えられましたか？



は夢が崩れています。それは当たり前前で、大学に入っているいるるな世界を知り、崩れていくことは、健康的なことです。しかし、目的なく大学に入学してきた学生が、1年たつて自分の将来を描ける割合は極端に低い。こういう時代であるからこそ、早くからのキャリアデザインはすごく大事なこととなります。こうした意識を学生に持たせる仕事は、どちらかと言えば、正課教育よりは正課外で行うキャリア教育の仕事となります。

中学・高校の進路指導は、今のあなたにどの程度影響を及ぼしていますか？

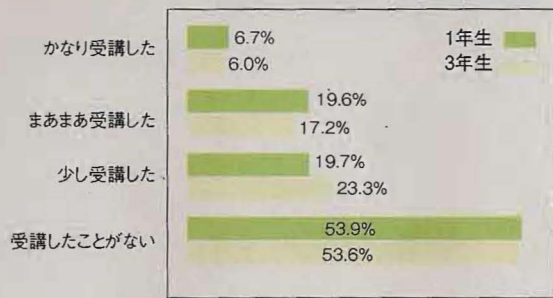


「即戦力」観と教育との関係

企業が大学教育に求めているものは、概して「即戦力」と呼ばれる部分だけです。高度な能力を求めているわけではないのですが、しかしゆっくり年数をかけて新入社員を育てる余裕はない。どんな分野の会社でも、セクションベースで仕事をします。新入社員が一人で仕事をすることなどありません。だから、新入社員でもできる程度の仕事しか

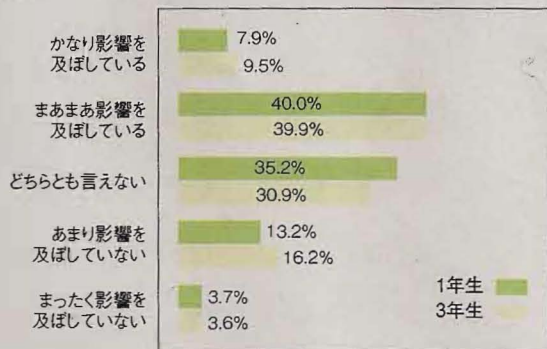
キャリア形成科目への受講

大学で、単位を取得できるキャリア形成科目を受講しましたか？



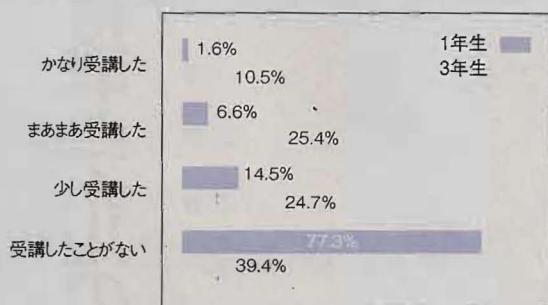
キャリア形成科目参加影響度

受講したキャリア形成科目は、どの程度影響をおよぼしましたか？



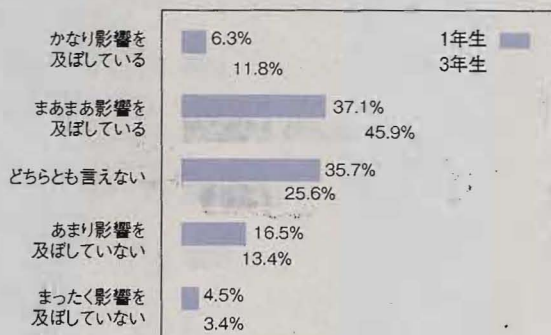
キャリア形成支援セミナーへの受講

大学で、単位とは無関係のキャリア形成支援セミナーや講座を受講しましたか？



キャリア形成支援セミナー参加影響度

受講したキャリア形成科目は、どの程度影響をおよぼしましたか？



※本文中のグラフは「京都大学／電通育英会共同 大学生のキャリア意識調査2007」より転載させていただきました。

任されません。そこで求められているレベルは個性的なものというよりは、しっかりとした文章が書ける、挨拶・コミュニケーションができる、チームで協同作業ができる、そんなことです。

これに短い時間で複数の仕事を次々に仕上げていかなければいけない能力の良などが加わります。問題はそうした技能や態度は、大学をはじめ、大学受験、高校教育でも、いろいろな学校教育の場で求められていることと同じだ、ということ。そんな特別なことではない。

だから、仕事に役立つとかそんなことではなく、将来力強く生きていくための基礎体力をつくる、そう考えればいい。「これは役立つ」とか「役立つ」とか、知識レベルの関連で考えすぎはいけません。

また、日本の大学はクラブ活動が盛んなことで世界的に知られていて、理科系の研究室が家族ぐるみで学生を面倒見るシステムなども含めて、そうした日本独自の良さも大いに価値を認め残していくべきです。また、学生は大いにそうした機会や環境を利用すればいいと思います。

正課と正課外の
バランス

社会人として一歩踏み出すための知識や力は、大学教育だけでは育てられません。生協の学生会や体育会、サークルなどの課外活動も大切です。授業は忙しくなっています、学生たちはうまく時間のやりくりをしています。ここは心配する必要はないし、心配しても仕方がありません。学生たちは置かれた状況のなかで、「よく学び、よく遊ぶ」わけです。

いろいろやっていると、新しいつながりができ、今まで思ってもみなかった世界や新しい課題が出てきて手応えを感じてきます。

そのためには、社会人としての基礎的な力を養う正課・正課外のキャリア教育、キャリア形成支援は大切です。他方、授業を通しての知識・技能・態度の包括的な能力を育成する正課教育があります。どちらも重要な課題で、一方だけが強調されるのではなく、バランスが重要であると考えています。

(編集部)